

# 稱讚 二四四号

2023年4月1日発行

またいはく(観念法門)、あみだぶつ「ただ阿弥陀仏せんねんを専念する衆生のみありてかの仏心ぶつしんの光、ひかりつねにこの人を照らして摂護しやうごして捨てたまはず。すべて余の雑業ざうごうの行者ぎやうじやを照らし摂むと論ぜず。これまたこれ現生護念増上縁なり」と。  
『教行信証(信巻・真仏弟子釈)』

親鸞聖人のお言葉に「現生十種の益とか『現世利益和讃』十五首を詠われておられます。現代語では「現生」も「現世」も殆ど同じ意味で使われているようですが、親鸞聖人には、それぞれ別の意があるかと思えます。

金子大榮師は、『親鸞の人生観』の中で、「おもうに仏教は生死を問題とするものであるにちがいはない。されどその応答には二つの道がかんがえられるようである。一つは生死を即今の問題としてその解脱をもとむるものである。禅に代表されている聖道はこの道をとるものであろう。一つは生死を現生



春季彼岸会法要 2023年3月19日(日)

発行 浄土真宗本願寺派 稱讚寺  
〒111-0075  
東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号  
TEL 〇三―五二四二―二〇二五  
FAX 〇三―五二四二―二〇二六  
HP shousanji.com

二〇二三年度 稱讚寺門信徒会費  
年会費 六千円  
振込先 城北信用金庫 一ツ家支店  
名義 浄土真宗本願寺派 稱讚寺教会  
代表 北村 信也  
口座 普通 6176051  
※ゆうちょ銀行の場合は、最終ページを参照ください。

の問題として、その帰依をもとむるものである。生  
のよるところ死の帰するところに解脱の一境をもと  
むるものである。それが浄土の教えというものであ  
ろう。そこには生死解脱は願われているが、しかし  
凡夫としての人間にとりては不可能であるという  
自覚があるのである。その生よるところとして如  
来の本願を信じ、その死の帰するところとして浄  
土の往生を期するのである。それはまことに自然の  
感情といわねばならない。したがってその浄土はこ  
の世と地つづきではなく、その往生は現生と時間つ  
づきではない。そこからの光はこの世を照らすかゆ  
えに彼岸のものであり、それは無生であるから未  
来といわれる。それで無生の原語Ajataは、未来と  
も来生とも翻訳された『梵和大辞典』のものであ  
う。その未来はいうまでもなく三世に属するもので  
はない。「生としてまさに受くべき生なく、趣とし  
て更にいたるべき趣なき」ところに感ぜられる超越  
的未来である。」と述べておられます。また、岡西  
法英師は「死を考える」の中で「物心ついてから意  
識を失うまでの現世しか知らないわたし。しかも  
短い人生の中のわずかな経験と知識で、見落とし  
間違いだらけのものさしでしか自分の人生を受け  
取つてないわたし。生まれる前も、死んだ後もみる  
ことのできないわたしは、実は自分の人生の意味も  
わかるはずがないのかも知れません。(P2下段へ)

# 稱讚寺 春季彼岸会法要

二〇二三年三月一九日(日)午後二時



ご参拝の皆さん

- 安達光成さん
- 中木原乃既子さん
- 高橋八重子さん
- 早崎光弘さん
- 福井恒彰さん
- 山田昌三さん
- 佐藤幸子さん
- 山下陽子さん
- 北村歌子さん
- 北村智度子さん

お天気にも恵まれ、春のお彼岸法要をお迎えいたしました。久しぶりに満堂(少ないイス席ですが)のご参拝でした。また、鹿児島から九一歳の母も参拝、おつとめしてくれました。  
 おつとめは、この度の「親鸞聖人御誕生八五〇年立教開宗八〇〇年慶讃法要の『新制 御本典作法』に沿って、おつとめしてみました。



(表紙の続き) 本当にその意味を知るのには、久遠のいにしえ以来のあらゆるいのちの歴史、目には見えない迷いと苦悩の果てしない過去を知り通

し、このいのちの帰する先をも見通したもう如来さまの智慧の眼より他ないのであります。とおっしゃっておられることが、金子師の「生死を現生の問題として、その帰依をもとむるものである」と言うことなのかなあと思うところでは。

そして、「二河白道の譬」は、「一切往生人等にもうさく」で始まります。その「一切往生人」とは、今、阿弥陀さまのご本願を聞き、お念仏を申している人、これまでに聞いたことがあり、お念仏申すであろう人、これから聞くであろう、お念仏申すであろう人と言う、全ての衆生のことでありましょう。その絵を見ますと、手前に此岸(現世)があり、向こう側に彼岸があります。その間に、一本の白い道が架かっています。旅人が歩いてきた此岸は、現世の人生を表しており、彼岸は憧れの地・自分本位の理想でありました。気づけば、後ろ(過去)から群賊・悪獣が追っており、川沿いの南北に逃れよう(現実逃避)とも、悪獣が迫ってくる。向こうに側に渡ろうとしても水火の波(貪欲・瞋恚)に呑み込まれる。いずれにしても死を免れないと思った時、お釈迦さまの「この道を渡りなさい」との声が聞え、彼岸から阿弥陀さまが、(なんぢ一心に正念にしてただちに来れ、われよくなんぢを護らん。すべて水火の難に墮せんことを畏れざれ)との声が聞えてきた。旅人は、その道を一步二歩したら、周りの声に振り向かず、水火の波にも罹ることなく、仏さまと成られている先人の皆さまにお会いするのです。思うに、この白道を歩く様子が「現生」を意味するのではないのでしょうか。現世でありながら、阿弥陀さまの本願(慈悲・智慧)のはたらき(お念仏)に包まれていることを味わっている姿でありましょう。そうはなれない私ではありますが、この姿を見ている私がココに居ます。

## 二河白道の譬え(書き下し文)

また一切往生人等にもうさく、いまさらに行者のために一つの譬喩(喩の字、さとす)を説き信心を守護して、もつて外邪異見の難を防がんと。なにものかこれや。たとへば人ありて、西に向かひて行かんとするに、百千の里ならん。忽然として中路に見れば二つの河あり。一つはこれ火の河、南にあり。二つにはこれ水の河にあり。二河おのおの闊さ百歩、おのおの深くして底なし、南北辺なし。まさしく水火の中間に一つの白道あり、闊さ四五寸ばかりなるべし。この道、東の岸より西の岸に至るに、また長さ百歩、その水の波浪交はり過ぎて道を湿す。その火焰(焰、けむりあるなり、炎、けむりなきほのほなり)また来りて道を焼く。水火あひ交はりて、つねにして休息することなけん。この人すでに空曠のはるかなるところに至るに、さらに人物なし。多く群賊悪獣ありて、この人の単独なるを見て、競ひ来たりてこの人を殺さんとす。死を怖れてただちに走りて西に向かふに、忽然としてこの大河を見て、すなはちみずから念言すらく、へこの河、南北に

辺畔を見ず、中間に一つの白道を見る、きはめてこれ狭小なり。二つの岸あひ去ること近しといへども、なによりてか行くべき。今日さだめて死せんこと疑はず。まさしく到り回らんと欲へば、群賊悪獣、漸々に来り逼む。まさしく南北に避け走らんとすれば、悪獣・毒虫、競ひ来りてわれに向かふ。まさしく西に向かひて道を尋ねて去らんとすれば、またおそらくはこの水火の二河に墮せんことを。時にあたりて惶怖することまたいふべからず。すなはちみづから思念すらく、へわれいま回らばまた死せん、住まらばまた死せん、去かばまた死せん。一種として死を勉れざれば、われ寧くこの道を尋ねて前に向かひて去かん。すでにこの道あり、かならず可度すべし」と。この念をなすとき、東の岸にたちまちに人の勧むる声を聞く、へきみただ決定してこの道を尋ねて行け。かならず死の難なけん。もし住まらばすなはち死せん」と。また西の岸の上に、人ありて喚びひていはく、へなんぢ一心に正念にしてただちに來れ、われよくなんぢを護らん。すべて水火の難に墮せんことを畏れざれ」と。この人、すでにここに遣はし、かしこに喚ばふを聞きて、すなはちみづからまさしく身心に當りて、決定して道を尋ねてただちに進んで、疑怯退心を生ぜずして、あるいは行くこと二分するに、東の岸の群賊等喚ばひていはく、へきみ回り來れ。この道嶮悪なり。過ぐることを得じ。かならず死せんこと疑はず。われらすべて悪心あつてあひ向かふことなし」と。この人、喚ばふ声を聞くといへども、またかへりみず、一心にただちに進んで道を念じて行けば、須臾にすなはち西の岸に到りて、永くもろもろの難を離る。善友あひ見て慶樂すること已むことなからんがごとし。これはこれ喩(喩の字、をしへなり)へなり。次に喩へを合せば、へ東の岸」といふは、すなはちこの娑婆の火宅に喩ふ。へ西の岸」といふは、すなはち極樂宝國に喩ふ。へ群賊・悪獣・詐り親しむ」といふは、すなはち衆生の六根・六識・六塵・五陰・四大に喩ふ。へ無人空迥の沢」といふは、すなはちつねに悪友に随ひて眞の善知識に値はざるに喩ふ。へ火のごとしと喩ふ。へ中間の白道四五寸」といふは、すなはち衆生の貪瞋煩惱のなかに、

よく清浄願往生の心を生ぜしむるに喩ふ。  
 〈水火の二河〉といふは、すなはち衆生の貪愛は水のごとし、いまし貪瞋強きによるがゆゑに、すなはち水火のごとしと喩ふ。善心、微なるがゆゑに、白道のごとしと喩ふ。また〈水波つねに道を湿す〉とは、すなはち愛心つねに起りてよく善心を染汚するに喩ふ。また〈火焰つねに道を焼く〉とは、すなはち瞋嫌の心よく功德の法財を焼くに喩ふ。〈人、道の上を行いて、ただちに西に向かふ〉といふは、すなはちもろもろの行業を回してただちに西方に向かふに喩ふ。〈東の岸の人の声の勧め遣はすを聞きて、道を尋ねてただちに西に進む〉といふは、すなはち釈迦すでに滅したまひて、後の人見たてまつらず、なほ教法ありて尋ねべきに喩ふ、すなはちこれを声のごとしと喩ふるなり。〈あるいは行くこと二分二分するに群賊等喚び回す〉といふは、すなはち別解・別行・悪見の人等、妄りに見解をもつてたがひにあひ惑乱し、およびみづから罪を造りて退失すと説くに喩ふるなり。〈西の岸の上に人ありて喚ばふ〉といふは、すなはち弥陀の願意に喩

ふ。〈須臾に西の岸に到りて善友あひ見て喜ぶ〉といふは、すなはち衆生久しく生死に沈みて、曠劫より輪廻し、迷倒してみづから纏ひて、解脱するに由なし。仰いで釈迦発遣して、指へて西方に向かへたまふことを蒙り、また弥陀の悲心招喚したまふによつて、いま二尊の意に信順して、水火の二河を顧みず、念々に遺ることなく、かの願力の道に乗じて、捨命以後かの国に生ずることを得て、仏とあひ見て慶喜すること、なんぞ極まらんと喩ふるなり。また一切の行者、行住坐臥に三業の所修、昼夜時節を問ふことなく、つねにこの解をなし、つねにこの想をなすがゆゑに、回向発願心と名づく。また回向といふは、かの国に生じをはりて、還りて大悲を起して、生死に回入して衆生を教化する、また回向と名づくるなり。『顕浄土真実教行証文類（信文類・大信釈）』 『註釈版聖典』二二三頁〜二二七頁

## トピック

「南日本新聞」に次の様に掲載されました。

去る三月二五日、鹿児島県の稱讚寺が運営する保育園が最後の卒園式を迎えました



### 『「お寺の保育園」65年ありがとう 佐多唯一の施設、運営法人解散 地元新団体引き継ぐ』

65年間続いた南大隅町佐多馬籠の「はまゆう保育園」が25日、卒園式と併せて開かれた。佐多地区唯一の保育園で、「お寺の保育園」として親しまれ、本年度の卒園者4人を含め千人以上が巣立った。運営してきた社会福祉法人「ひかり福祉会」は少子化などを理由に三月末で解散し、四月から地元住民が中心となって新設した同法人「佐多みらい」が担当。  
 浄土真宗本願寺派稱讚寺の住職北村龍也さん（故人）が、1958（昭和33）年に私設「ひかり幼稚園」を開いたのが始まり。統合などを経て2002年、はまゆう保育園として再スタートした。20年ほど前に70人ほどいた園児は減り続け、本年度は10人だった。定員（60人）割れが続いたこともあり、同福祉会は事業終了と法人の解散を決定。地域に保育施設がなくならないよう、佐多みらいに託すことにした。  
 福祉会として最後の卒園式には行政、学校関係者ら約50人が出席。卒園生の永吉来翔ちゃん（6）は「鬼ごっこをして外で遊んだことが思い出。小学校は楽しみだが、優しい園長先生とお別れは悲しい」と話した。  
 福祉会理事長で園長の北村龍史さん（66）は「子どもの命を預かることは大変なエネルギーがいるが、大過なく65年が過ぎた。みなさんのおかげ、ご縁に感謝」と述べた。園旗を引き継いだ佐多みらいの前田利香理事長（49）は「思いをつないで地域の方々と一緒に子どもたちを育んでいければ。取り組みを積極的に情報発信していきたい」と語った。（転写）

親鸞聖人御誕生八五〇年  
立教開宗八〇〇年

慶讃法要企画

## 親鸞聖人を知ろう

### 勸学・司教有志の会

### 「新しい領解文(浄土真宗のみ教え)」

### に対する声明

(一)

このたび御正忌報恩講におけるご門主さまの「ご消息」のなかで、「新しい領解文(浄土真宗のみ教え)」(以下「新しい領解文」)が發布された。従来の「領解文」(大谷派では「改悔文」)は、真宗法義の模範的領解を言語化したものとして、本願寺派、大谷派において、ながらく門信徒の指針となってきたが、時代の変化に応じて平易な言葉を用いた現代版の領解文として、新しく發布されたものである。

しかし、これについては勸学寮から『本願寺新報』二月一日号において、長文で難解な解説が掲載され、『中外日報』二月十日号には、「真宗教義に沿った解釈を基礎に持たないと誤解が生じる可能性があるため、解説を熟読してほしい」との見解が掲載された。この「新しい領解文」は、五年後(二〇二八年)に全寺院での一〇〇%の唱和を目指すものとして、すでに全国各地

の僧侶や門信徒に強くはたらきかけがなされ、布教使にもこれに基づき学びを深めるように指示がなされている。また、すでに本願寺及び宗派関連施設での法話は「新しい領解文」を元にするようにと指示がなされている。決して誤った法義理解に結びつかないよう最大限の配慮が不可欠である。にもかかわらず、發布直後に勸学寮から長文かつ難解な解説文が出され、誤解を危惧する見解まで紙面に掲載されていること自体、異常である。これは「新しい領解文」が領解文としての意味をなさないことを示している。

發布された「新しい領解文」は、全般を通して、宗意安心を大きく誤るものとして懸念されるが、とりわけ『中外日報』掲載の勸学寮の見解において「特に議論した」とあった第一段の以下の箇所については、最も深刻な危惧を抱かざるをえない。

私の煩惱と仏のさとりは 本来一つゆえ  
「そのまま救う」が 弥陀のよび声

これは「煩惱即菩提・生死即涅槃」という言葉を不二円融の理をもって解釈し、「そのまま救う」という本願の救済の起こされた理由として読める。しかし端的に言って、如来の本願は、煩惱と菩提が「本来一つゆえ」に起こされたのではない。私たちはすでに、宗祖親鸞聖人の

「仏願の生起本末を聞きて疑心あることなし」というお言葉のなかに、本願救済の理由をいただいているのではないか。「仏願の生起」すなわち本願の起こされた理由は、煩惱具足の私にこそある。無始よりこのかた出離の縁なき凡夫のために、本願は成就しているのであり、これよりほかに本願救済の理由はない。したがって、領解の表出としては、

煩惱具足 出離の縁なき わが身ゆえ  
「そのまま救う」が 弥陀のよび声

という趣旨の文脈とならねばならない。従来の「領解文」において「もろもろの雑行雑修自力のこころをふりすてて」とあり、まず第一に、自力心の否定を出言してきた所以である。しかし「新しい領解文」では、仏願の生起として、無始よりこのかた出離の縁なきわが身という機実(私の真実のありさま)をおさえるべき箇所には、「私の煩惱と仏のさとりは 本来一つゆえ」という文言が置かれている。何一つ善をなさない煩惱具足の凡夫という機実をおさえず、煩惱と菩提が「本来一つゆえ」であることを理由として「そのまま」の救いを理解することは、法義の領解を大きく誤り、きわめて安易な現実肯定論に陥るおそれがある。歴史的に検証され批判されてきたものであるが、その現実肯定論とは、世

俗のありさまをすべて肯定する思想であり、戦争・差別・暴力などの人間の愚かな営みを否定できないだけでなく、むしろ正当化する根拠とさえなる。それはまた、人間の意思と努力を無意味なものとし、信心も念仏も、仏法を聴聞することさえも不要とする思想に繋がる。煩惱と菩提が「本来一つ」であれば、救われる必要すらないからである。

このように、第一段の当該箇所は、宗祖の示されたご法義に対する重大な誤解を招くものと言わざるをえない。勸学寮の解説文では、当該箇所について「阿弥陀如来の立場から」の説示であり、「さとり智慧から衆生救済のはたらきが導き出される」と語られているが、そもそも「領解文」が自身の領解の表明であるかぎり、衆生の立場からの文言でなければ意味を持たない。仮にそれが仏のさとの立場からは言えたとしても、領解の混乱を生ずることは明らかである。「新しい領解文」はそもそも領解文としての意義を失っているが、特にこの一段により、すでに全国の寺院・門信徒の間に大きな混乱を招いており、勸学寮の解説文は、その混乱に拍車をかけるものとなっている。

以上、このたび制定された「新しい領解文」について、我々は、宗意安心の上で重大な誤解を生ずる危惧を抱かざるをえない。そして何より、宗祖のご法義に重大な

誤解を招きかねない文言が、ご門主さまの名のもとに発布される「ご消息」として掲げ続けられることを、座視することはできない。平易な言葉を用いた現代版「領解文」を閉めそうとされた意図は理解できるが、発布された文言によって、かえって全国的な混乱を生じている。したがって、宗祖親鸞聖人のご法義に照らして、速やかに取り下げるべきである。そして、ご門主を中心として、すべての門信徒が安心して出言できる文言をあらためて作成し、真の現代版「領解文」として制定すべきである。なお、この声明文は本願寺派の勸学・司教有志により発するものであるが、その「志」（こころざし）とは、ご法義を尊び、ご門主さまを大切に思う、愛山護法の志であることはいままでもない。

二〇二三年 三月二五日  
浄土真宗本願寺派 勸学・司教有志の会  
代表 深川宣暢（勸学）  
森田眞円（勸学）  
普賢保之（勸学）  
宇野恵教（勸学）  
内藤昭文（司教）  
安藤光慈（司教）  
楠 淳澄（司教）  
東光爾英（司教）  
殿内 恒（司教）

武田 晋（司教）  
藤丸 要（司教）  
能仁正顕（司教）  
松尾宣昭（司教）  
福井智行（司教）  
井上善幸（司教）  
藤田祥道（司教）  
武田一真（司教）  
井上見淳（司教）  
他数名

三月二九日からご本山で、「親鸞聖人御誕生八五〇年・立教開宗八〇〇年慶讃法要」が始まりました。稱讃寺の団体参拝も愈々近づいて参りました。（四月二四日参拝）

この法要では、全法要において、「新しい領解文」が唱和されることになっております。参拝された方の中には、これまでの「領解文」（蓮如上人作）を唱和に合せて出言される方もおられたようですが、逆に迷惑なことだと思います。

『浄土真宗の教章（私の歩む道）』の「生活」には、「親鸞聖人の教えにみちびかれて、阿弥陀如来のみ心を聞き、念仏を称えつつ、つねにわが身をふりかえり、慚愧と歓喜のうちに、現世祈祷などにたよることなく、御恩報謝の生活を送る。」とございます。

この「新しい領解文」は、私自身の領解には至っておりませんので、「慚愧と歓喜」の思い起こせるよう、「黙読」しようと思っております。ご唱和されるか、黙読されるかは、参拝される皆さまの一人お一人の御はからいです。

二〇二三年(令和五)年度  
稱讚寺活動計画

七月

六日(木) 午後二時 のんのん法話会  
 一六日(日) 午後二時 のんのん法話会  
 兼・歓喜会法要

八月(予定1)

六日(日) 午後二時 のんのん法話会  
 一六日(水) 午後二時 のんのん法話会  
 兼・孟蘭盆会法要

八月(予定2)

六日(日) 午後二時 のんのん法話会  
 一一日(祝) 午後二時 孟蘭盆会法要  
 一二日(土) 午後二時 鹿兒島・稱讚寺孟蘭盆会法要

二六日(土) 午後二時 のんのん法話会

九月

六日(水) 午後二時 のんのん法話会  
 一六日(土) 午後二時 のんのん法話会  
 一八日(月) 千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要  
 二四日(日) 午後二時 秋季彼岸会法要  
 二六日(火) 午後二時 のんのん法話会

十月

六日(金) 午後二時 のんのん法話会  
 一五日(日) 午後二時 のんのん法話会  
 二六日(木) 午後二時 のんのん法話会

十一月

六日(火) 午後二時 のんのん法話会  
 一一日(土) 午後二時 のんのん法話会  
 兼・築地本願寺報恩講

一六日(木) 午後二時 のんのん法話会  
 二六日(日) 午後二時 のんのん法話会

十二月

六日(水) 午後二時 のんのん法話会  
 一六日(土) 正午 親鸞聖人報恩講

二〇二四年一月

六日(土) 午後二時 のんのん法話会  
 九日(火) 午後二時 本山・御正忌報恩講  
 一六日(火) 午後二時 のんのん法話会  
 二六日(金) 午後二時 のんのん法話会

二月

六日(火) 午後二時 のんのん法話会  
 兼・如月忌  
 一六日(金) 午後二時 のんのん法話会  
 二五日(日) 午後二時 のんのん法話会

三月

六日(水) 午後二時 のんのん法話会  
 兼・円光大師会(法然聖人)  
 一六日(土) 午後二時 のんのん法話会  
 二四日(日) 午後二時 春季彼岸会法要  
 二六日(火) 午後二時 のんのん法話会

四月

六日(木) 午後二時 のんのん法話会  
 兼・灌仏会(花まつり)

一六日(日) 午後二時 のんのん法話会  
 兼・聖徳太子会

二三日(日) 午後二時 親鸞聖人御誕生八五〇年  
 立教開宗八〇〇年慶讃法要 団体参拝

二六日(水) 午後二時 のんのん法話会

五月

六日(土) 午後二時 のんのん法話会  
 一六日(火) 午後二時 のんのん法話会  
 兼・親鸞聖人降誕会  
 兼・覚信尼公御祥月

二六日(金) 午後二時 のんのん法話会  
 兼・中宗大師御祥月(蓮如上人)

二八日(日) 午後二時 築地本願寺親鸞聖人降誕会

六月

六日(火) 午後二時 のんのん法話会  
 一六日(金) 午後二時 のんのん法話会  
 二五日(日) 午後二時 永代経法要  
 二六日(月) 午後二時 のんのん法話会

# 稱讚寺 行事予定

二〇二三年 四月の行事予定

六日(木) のんのん法話会 一四時  
兼・灌仏会

一六日(木) のんのん法話会 一四時

二三日(日) ～二四日(月)

親鸞聖人御誕生八百五十年  
立教開宗八百年慶讃法要 団体参拝

二三日(日) 「親鸞展」鑑賞

懇親会

二四日(月) 午前の座 法要参拝

「若き日の親鸞」観劇

二六日(水) のんのん法話会 一四時

## 順縁送縁

じゅんえんぎやくえん

そだ

すべてがお育てとなる

二〇二三年「心のともしび」四月カレンダーより

## 「本願寺たすけあい募集」について

### 1. 募金の名称

- ①「ウクライナ緊急支援募金」
- ②「トルコ・シリア地震緊急支援募金」

### 2. 受付口座番号 (①②同じ)

〈銀行振込〉 銀行 ゆうちょ銀行  
店名 一〇九(イチゼロキュウ)店  
番号 当座 0069957  
名義 たすけあい募金

### 3. 通信欄記載について

- ①の募金の場合は、「ウクライナ緊急支援」とご記入ください。
- ②の募金の場合は、「トルコ・シリア地震緊急支援募金」とご記入ください

二〇二三年度 一遺骨一時お預かり費  
管理費 五千円

永代使用積立金 五千円から

振込先 城北信用金庫 一ツ家支店

名義 浄土真宗本願寺派 稱讚寺教会

代表 北村 信也

口座 普通 6176051

振込先 ゆうちょ銀行

店名 四四八(ヨンヨンハチ)店

名義 キタムラ シンヤ

口座 普通 237485

### 編集後記(愚案)

先月行われたWBC(ワールド・ベースボール・クラシック)は興奮してしまいました。メキシコとの準決勝では、ああ負けるかなとガククリしていたところ、不振の村上選手が逆転さよならを打って、声を出して飛び跳ねました。また、アメリカとの決勝戦では8回・9回にダルビッシュ選手から大谷選手への継投、最後の最後に、大谷選手とトラウト選手の勝負、空振り三振でゲームセット。ドラマよりドラマチックで、視てて感動してしまいました。大会前から大会中のチームのエピソードを聞くと、栗山監督もすごいし、大谷選手だけではなく、どの選手スタツプもいなければ、優勝出来なかったのかもしれない。口先だけの「信じている」だけでは、このような結果にはなれなかった。選手同士思いやり、相手をもリスペクトする姿勢を聞いたら、涙ぐんでしまいました。スポーツ選手は勝ち負けではなく、自分の振る舞いを通して、人々に希望を歓喜を感じてもらえるよう日々精進しておられたのだなあとあらためて知らされました。私は視てて勝てば喜び、負ければ、あの時あーすれば良かったのにと監督・選手にブツブツ言いながらテレビを切っていたことでしょう。優勝の余韻そのままテレビを視ていたら、ウクライナ情勢のニュースが流れました。WBCの期間中、私はウクライナの人々のことを徹塵も心に留めていなかったことを恥じるばかりです。